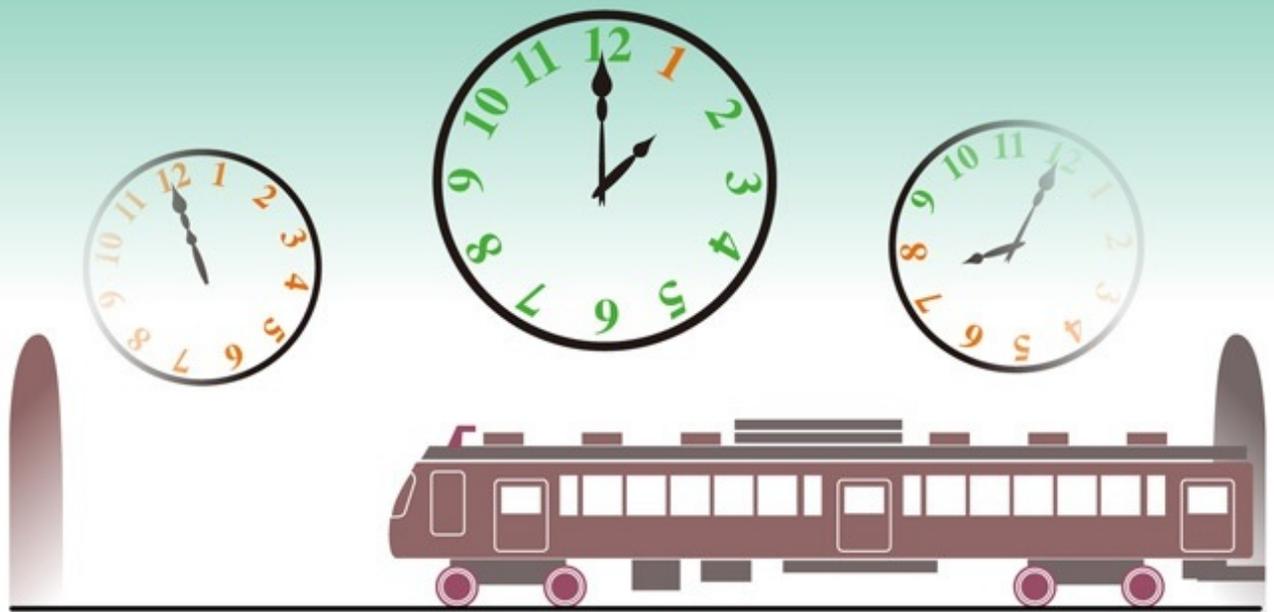


# 時計電車



作・画 久宝田 晃  
Kyhoden Akira

## 帰宅電車

---

今月で四十五歳になるのか、と思った。

最近は残業も減って以前よりも少し早めに帰宅できるようになった。今日は外出先から直接帰宅することができたのでさらに早い帰宅だ。とはいっても、すでにアルミ合金製の腕時計は夜の十時を示していた。

電車内の周囲を見ると顔を赤くして座席に座る男性サラリーマンの顔が多い。たいていはいは一杯ひっかけての帰宅なのだろう。しかしおれは仕事を終えてまっすぐ帰宅する途中である。

いつからこのパターンになったのだろう。

ふと別の座席を見ると、一つ席が空いていた。その座席の前にヘッドフォンで音楽を聴いている制服姿の高校生が立っていた。

おれも高校生の頃は自分の目の前の席が空いていても座ろうとしなかったな。体力も気力もあったからな。いや、それだけじゃないぞ。将来への不安もなにもなかった。そう、あの頃は向かうところ敵無しって感じだったよな。それが今はどうよ。

そういえばこの電車、おれが高校生の時に通学していた路線じゃないか。それにしてもまったく変わっていないな。あの頃はおれがおやじになる未来ではこの電車も空を飛ぶのだろうと思っていたけど...座席の色と電車の塗装が変わっただけか。

もうすぐ小さなトンネルに入る頃だったな。なつかしいな。トンネルを抜けたら雪国だった、なんて小説を読んだのも高校生の頃だったな。

電車は昔と変わらずトンネルに入った。数十秒後、トンネルを抜けた。

おれの腕のラバーバンドの時計は午後四時を示していた。

次の駅で降りようか、どうしようか。今日こそあの子に告白するために部活をさぼって早く帰宅したのだ。え〜い、どうしたおれ。

電車は駅に着いた。ぷしゅっ、という音の後にドアが開いた。数十秒後にドアは再び閉まった。

ああ、なさけねえ。やっぱり今日も告白できないのか。帰ってから電話してみようか。駅で降りる勇気もないくせに電話なんてかけられるわけがないさ。あ〜これで何回目だよ。ほんとなさけねえなあ、おれ...。

電車は次の小さなトンネルに近づいた。

はあ...二つ目のトンネルか。このトンネルを越えたらおれの家へ帰る駅が待っているのか。どうして最初のトンネルを越えた駅で降りる勇気がないんだろう。くやしいな...。

電車は二つ目のトンネルを抜けた。

あっ！ 今、確かに高校生のおれだったぞ。あのトンネル、そうだ、学校の帰りのトンネル、なつかしいなあ...って、ちがうだろっ。

今、おれは確かに高校生に戻っていたぞ。あれは夢ではない。あれは高校生の時のおれだ。

そうそう、片想いの彼女にどうしても告白することができなかつたんだよな。今だったら余裕で告白できるのになあ...。

おいっ！ おれ、しっかりしろ！ そうじゃないだろう。今さっきの一つ目のトンネルを越えた時、高校生に戻ったあの幻覚、いや、幻覚じゃなかったぞ。もしかして、あの当時に戻れるのかもしれないぞ。

.....

んなわけないだろう。今月の誕生日で四捨五入したら五十歳代になるおれ、しっかりしろや。

.....

でも、もしもだぞ、もしも...

明日は土曜日。この電車にもう一度だけ乗ってみようかな。うん、そうだ。今思うと確かにぼうっとしていたから、やはり幻覚だったのかもしれないな。もう一度乗ればわかるからな。おっと、せっかく早く帰るから妻にメールでもしておくか。

## 時計電車

---

翌日、おれは昨夜の事実を確かめるべく家を出た。妻には昨日寄った仕事先に忘れ物を取りに行くとか適当な言い訳をしておいた。できるだけ昨日と同じ状況で試そうと思い、まずはおれの勤める会社の駅から路線をなぞることにした。

おれは昨夜のことを思い出し復習してみた。一つ目のトンネルに入る前、高校生の頃を思い出して腕時計を見ていたな。トンネルを抜けたらたしか午後四時頃だった。しかも腕時計は当時していた黒のラバーバンドで防水デジタルタイプだった。さあ、もうすぐ一つ目のトンネルだ。なんかおれ...いったいなにやってんだらう。高校生に戻れるわけないだらう。もしかしておれって精神病なのだらうか。トンネルを抜けてなにも起きなかったらそれはそれでおれの精神病を疑う必要があるかもしれないぞ。とにかくここまで来たのだ。あと数秒後にトンネルだ。トンネルを抜けたらすぐに駅だ。

トンネルを抜けると、おれの腕のラバーバンドの時計は午後四時を示していた。電車は駅に着いた。ぷしゅっという音の後にドアが開いた。数十秒後にドアは再び閉まった。

ああ、なさけねえな、おれ。やはり今日も告白できずに駅を降りずに通過してしまった。何度も部活はさぼれないし。神様、おれにほんの少しの告る勇気をください...

電車は二つ目のトンネルを抜けた。

ああっ！ やっぱりだ、今のはっきりしたぞ。戻った、高校生のおれに戻っていた。

しかしどういうわけか、二つ目のトンネルを越えたとおやじのおれに戻ってしまう。よしもう一度試してみよう。次の駅で降りて戻ってもう一度試してみるんだ。

もう、まちがいない。五回とも同じだ。おれはこのトンネルを利用すれば高校生に戻ることができるのだ。これは世紀の大発見だ！

しかし問題が一つ。高校生に戻ったところで今のおやじのおれの記憶がない。というより戻ったという認識がまるでない。同じことの繰り返しだ。一つ目と二つ目のトンネルの間だけ高校生に戻れるだけだ。そしてその時のおれは途中の駅で降りることができずに二つ目のトンネルを抜けてしまう。そこでまたおやじに逆戻りだ。おやじに戻ると高校生に戻った記憶は残っている。高校生に戻った時に、どうにかしておれが未来から戻ったことを伝えることができればよいのだが.....。

おれはその日、とりあえず自宅に帰った。そして夜になり家族も寝静まった頃、一人でインターネット上になにかヒントがないか調べてみた。

そんなものあるはずがない。あるものは同じようなテーマの小説の話題や映画の話題ばかりだ。しかしそんな情報の中からおれなりにいくつかのヒントを得ることができた。

現在から過去へ伝達するものを持ち込むことができないだらうか。もしメモとかを持たせることができれば過去の自分に伝言することができるかもしれない。

次に過去に伝言を伝えることができたなら未来に戻らないために一つ目のトンネルを越えた駅で必ず途中下車させることだ。そうすればそこから新たな人生をスタートできるかもしれない。

おれは過去に戻ってからの新しい人生を成功させるためにも、現在までに培ってきた経験や知識をまとめて伝言しようと考えた。さらに過去のおれにとっては未来の出来事となる史実などの資料を準備することにした。

それからの一週間、おれは仕事も上の空でなかなか集中できないでいた。早く次の週末が来ないかと毎日考えていた。そして日夜、過去のおれに伝えるべく資料作りで睡眠不足にもなっていた。すでに四十五歳の人生になんの未練もない気持ちになっていた。

## 新しい人生

---

ようやく長い一週間が過ぎた。

さて、いくぞ！ 過去のおれ、将来への不安も持たず怖いもの知らずの頃のおれ、あの頃に戻って人生を成功させるのだ。

おれは再び例の路線に電車でやって来た。まず確かめることは過去に現在のものを持って行くことができるかどうかだ。

おれの試みは半分成功して半分失敗だった。

過去にもものを持ち込むことはある程度成功した。たとえば、戻った時は現代とほぼ同じポーズをしているので、手にメモなどを握らせておくとそのまま持ち込むことができたのだ。しかしそれを読んだ過去のおれが不可思議に思い、まるで伝言を信じてくれないのだ。

おれはまず過去の自分にこの事実を信じさせるための説得から始めなければならなかった。

最初の試みからすでに三週間が経過した。

おれしか知らないことを伝言に書いて信じ込ませようとしたが、おれ自身からおれに伝言を書いたところでなんの効果もない。

そこでおれは三週間かけてとびきりのアイデアを考えた。要はおれが一つ目のトンネルを抜けた先の駅で必ず降りるようにしむけることだ。おれが当時片想いしていた彼女への告白する勇気を与えることや攻略方法を教えてやればよいのだ。大人の階段を登ってきたおれにはたやすいことだ。ましてや過去の知っている人物なら簡単だ。さらにおれはその攻略方法を記述した伝言に追加の内容もうまく加味しておいた。それはこれから起こるであろう史実などについてだ。彼女を攻略するためにもこの史実の予知は有効的に使えるからだ。どこかの映画で過去に未来のギャンブルに関する史実を持ち込み大金持ちになって成功したというのがあった。そのアイデアはもちろんいただいた。

さていよいよだ。過去のおれ、今度こそ未来のおれを信じてくれよな！

そう願いながら三週間目の試みを開始した。

電車は一つ目のトンネルを越えた。

おれは次の駅で降りる勇気をどこからしぼりだそうかと考えていた。腕時計を見ると午後四時になっていて...

あれ？ 時計と腕の間に挟まっているこの紙くずはなんだろう。

次の駅が来る数十秒間におれはその紙くずを見て愕然とした。その紙くずには次の駅を降りたロータリーに彼女が一人にいるという情報だった。しかも情報を出した主はおれが最も信頼している友人からだった。彼がすでに手配しておいたから電車は必ず降りるようにと書いてあった。さらにポケットに細かい指示を入れておいたから駅を降りたらすぐにホームで読むようにと書いてあった。

学生服のポケットに手を入れてみるとたしかに憶えのない手紙が入っているではないか。

そうかあ、あいつ...うれしい余計なお世話をしてくれるじゃないか。ここまで応援されて駅を降りなかったら男がすたるぞ。

電車は駅に着いた。ぷしゅっという音の後にドアが開いた。数十秒後にドアは再び閉まった。

おれはその駅で降りてホームに立っていた。改札を出る前にホームのベンチに座り、友人から

の手紙を出して読んだ。

手紙の内容には彼女への告白方法や彼女をゲットするあらゆる方法が的確に書いてあった。そして近日決まる新しい総理大臣の予想や競馬の予想まで書いてあった。

おれは友人がここまで雑学に詳しいとは意外に思ったが、今は彼女をものにできるのならなんでもやってやろうという気持ちでいっぱいだった。

その日から夢のような人生が始まった。不思議なことに友人にお礼を言っても、とぼけるだけである。現金なもので彼女をゲットしてからのおれは友人とのつきあいはそっちのけで、そのうち疎遠になってしまった。おれは友人の書いてくれた競馬の予想でどんどんお小遣いが増えた。増えたお金でまた競馬をするから大学生に進む頃にはえらい羽振りがよくなっていた。不思議なことに友人がくれた手紙にはおれが大学生になった頃に、現金を全部アメリカのドルに替えろと予想が書いてあった。今まで友人の手紙に裏切られたことはないからすべてそれに従った。おれは自信に満ちた人生を歩み始めた。

## トンネル事故

---

...いつからこのパターンになったのだろう。

今月でおれも四十五歳になるのか、と思った。やりたいことはほとんどやりつくして最近とてもむなしいのだ。

日本の鉄道王とまで言われるようになったおれだがどこかむなしい。久しぶりに自分が経営する路線の電車に乗ってみた。

運転手付きのリムジンに乗らないと監査役らが怒るのだ。今やおれは身勝手に電車など乗れる身分ではないのだ。しかしばかばかしい。電車に乗る自由もない成功者などちゃんちゃらおかしい。

そこでおれは久しぶりに高校生の頃に通学で乗っていた路線の電車に乗りたくなり、リムジンをすっぽかして誰にも連絡せずに一人で電車に乗ったのだ。

あ〜なつかしいな。もうすぐ思い出の一つ目のトンネルだ。

そう言えばあのトンネルを抜けてからおれの人生が変わったような気がするな。それも友人がくれた恋の手ほどきのメモや手紙によってだったな。あいつ、今頃どうしているかなあ。あ〜あの頃に戻りたいな。おれはもっとごく普通のサラリーマンとかでごく普通の幸せな人生を送りたかったな。自由があっていいよな。ヘリコプターで東京から大阪へ飛んだりはやできないかもしれない。でもそんなことまでして常に時間に縛られていったいなにをしたいのだろう。ただ競馬をうまく当てて儲ける予想屋とかすればよかったなあ。もうすぐトンネルか、本当になつかしいな。このトンネルも今やおれのものなんだなあ。

「乗客の皆様にお知らせします。当列車はただいまトンネル内にて緊急停車いたしました。ただいま前方の列車がもう一つ先のトンネル内で事故を起こし、トンネルが封鎖された報告が入りました。こちらトンネルの中でご不備をおかけいたしますが今しばらくお待ちください」

携帯電話は圏外か。まったく事故を起こした運転士は誰だ？ 人身事故になっていないといいがな。またなんでこの鉄道のオーナーであるおれが乗っている時に限ってこんな事故を起こしやがる！

「大変お待たせいたしました。ただいまより運転を再開いたします。前方の事故のためこの列車は次の駅止まりとなります。お急ぎのところお客様にはご不備をおかけしますが次の駅にて最寄りの駅への振替輸送の手配をいたします」

ほほう、手配が早いな。さすが我が社の鉄道だ。今は午後十時過ぎか。これから全員徹夜だな。社員達もあわてておれを探しているだろうな。まあ現場にいたと言ったらみんな驚くだろうな。まてよ、報告を改ざんしないか見てやろう。よしおれがこの電車に乗っていたことはしばらく内緒にして報告を聞いてやるかな。おれも次の駅で降りて一般客のように駅員の指示に従ってみるか。よい機会だ。たまにはこうやって現場を見てみるのもよいだろう。

## 時計電車再び...

---

電車はトンネルを出た。

あれ？ 今、夜の十時過ぎだったよな。外が昼みたいに明るいじゃないか。トンネルの事故はどうなったんだ？

電車は駅に着いた。ぷしゅっという音の後にドアが開いた。

「ねえおじさん、降りないの？」

「え？」

おれは後ろにいた女子高校生に声をかけられた。どこかで見覚えのある顔だな。

女子高生はカップルらしく、黙っているおれと一緒にいた男子高校生が言った。

「おれたちもここで降りるので、ちょっとよけてくれませんか？」

「あ、ああ、すまない。私もここで降りるよ。というか事故があったから全員降りないといけな  
いからね」

「事故？ どこであったの？」

「どこって次のトンネルだよ」

「なんだかわからないけど、じゃあおれたちは先に降りますので...くすくす」

そう笑って電車を降りた高校生カップルと一緒におれも降りた。

おれはホームで走り去る電車をぼうぜんと眺めながら思い出した。

待てよ、今の男子高校生...あいつ、なつかしいと思ったら高校時代の友人にそっくりだ。あっ  
！ あの女子高生、あの子はおれがこの駅で降りて告白した恋人にそっくりだぞ。

おれはいやな予感がして。駅の改札に向かう二人を追った。しかし二人はすでに駅から消えて  
いた。おれは駅員がいる事務所向かった。社員証でもあるカードを駅員に見せて事務所にづか  
づかと入ろうとすると駅員数人に止められてしまった。

「ちょっとあんた、勝手に入ってきては困るよ。どうしたの、忘れ物かなにかかい？」

おれは会社の社長の顔も知らないのかと言わんばかりに大声でどなった。

「馬鹿者。私を知らないのか？ このカードが見えなかったのか？」

「はあ？ どれどれ...」

駅員数人がおれの社長でもある身分証明書の社員証を見てひそひそと話をしていた。そしてや  
っとこちらに来て挨拶をした。そうそう、びびっただろうに。まあ、無礼は許すからして...。

「あのね、どこの鉄道マニアの方が知りませんがね、うちの鉄道会社の身分証など勝手に作っ  
てはいかんよ、あんた。だいたいうちの鉄道会社のロゴマークもちがうじゃない」

「な、なんだと？」

「しかも代表とか書いてあるし、日付もちんぷんかんぷんじゃないの」

「おまえ、自分が何を言っているのかわかっているのか？」

「それはこっちのセリフ。こういうことってね、犯罪ですよ。さあ、どうします？ 警察呼び  
ます？ それとも嚴重注意で帰りますか？」

おれは自分の会社の社員のモラルの低下に失望したが、同時にあまりにも様子がおかしいこと  
に気がついた。そもそも、トンネルに入る前は夜だったのが、今は明るい昼過ぎだということが  
おかしい。おれは事務所の時計を見た。時計の針は午後四時を示している。しかしおれの腕時計

はまちがいなく午後十時を過ぎている。

ぼうっとしているおれを見かねて駅長バッヂをつけた男がおれに近寄ってきて言った。

「私も学生の頃はね、こんないたずらをしましたよ。鉄道マニアでしてね」

「……」

おれは事務所のカレンダーを見てなにも言えなくなってしまった。茫然自失と化しているおれに駅長はおれの肩をぽんぽんと叩いた。

「まあ、あなたにもご家族とかいるのでしょうか？ 今日はまだ早い。このままお帰りください。こちらも騒ぎ立てるつもりもありませんから」

そう言っておれを立てさせて事務所から出し、改札の外に送り出してくれた。肩をがっくりしているおれに駅長は言った。

「さっきの鉄道会社のロゴ、センスいいですね。未来的ですよ。うちの鉄道会社、マークは変わらないと思うけど、変わるとしたらあんなのがよいですなあ。ではお気をつけてお帰りください」

## 自分から届いた手紙

---

おれはどういうわけか、トンネルを抜けたら三十年くらい過去の時代に来てしまったらしい。これは夢なのだろうか？

おれはハンカチで額の汗を拭こうとポケットに手を入れた。そこにはハンカチと一緒に手紙のようなものが入っていた。その手紙には次のようなことが書いてあった。

『過去に戻ってしまったおれへ。この手紙を読んで理解できるということは現在放心状態になっていることだろう。最初に言うておくが、この手紙を電車を降りずに読んでいるならば、おまえは栄光を手にした未来へ戻ることができる。しかし電車を降りて駅を出てしまったら未来へは戻ることができない。その時代から新たな人生を過ごすしかない。ここから先は電車を降りてからこの手紙を読んだおまえのためのことを書いてある。おれは何度か過去に戻って未来をやり直したらしい。らしい、と言うのはどれも正確な証拠が残っていないからだ。しかしあるとき気づいたことがあった。それは何度過去へ戻って未来をやり直しても、結局四十五歳の誕生日直前で過去へ戻されてしまうということだ。過去へ戻ってもほとんどの場合が過去の若い自分に戻るので自分自身では戻ってやり直していることに気がつかないでいるのだ。おれは何回過去へ戻って人生を繰り返しているのかもわからない。この繰り返しの人生にはトンネルが重要な役割を果たしていることに気がついた。トンネルは二つある。一つ目のトンネルを抜けると十五歳の過去、つまり三十年前の過去に戻る。しかしどんな方法であれ、二つ目のトンネルを通過して抜けると再びもとの未来へ戻ることができるのだ。注意することは一つ。過去に戻った時に十五歳の自分ではなく、四十五歳の自分のままであった時は要注意だ。この現象が起きた時はこの繰り返しの人生が終わる時だからだ。その原因が起きる理由は一つ。二つ目のトンネルがなんらかの事故で崩壊したり消滅した時だ。そうなった時は過去で二つ目のトンネルを越えて未来へ戻るしかない。ただしその時、どんな自分の未来に戻るかは計算できないのだ。今まで何度もやり直している人生のどれかの四十五歳直前に戻るのだ。戻った時には今の記憶も一緒に加算される計算だ。さきほどから計算とか書いているが、実はこの手紙を書いているおれは科学者になったおれなのだ。この事実を解明したことを話すと数千頁からなる論文となってしまうのでここでは省略しておく。それではおまえが、いやおれがどんな状況でこの手紙を読んでいるか心配ではあるが、なんとしても未来へ、いや先ほどまでの時代へ戻ることを祈っている。三十年間の人生を何度も生きてきたおれから、おれへ』

## 開かれた玉手箱

おれは駅のロータリーの噴水の前のベンチで手紙を読み終えた。つじつまは合っている。誰かのいたずらにしては巧妙すぎる。駅の風景や走っている自動車などを見ても時代が過去だということもわかる。考えてみるとなにやらいろいろと思い出してきた。なんとなく科学者だったような気もするし、平凡なサラリーマンだったような気もする。なんだか頭が混乱してきたというより、今までの記憶がどんどんよみがえってきそうな、まるで記憶喪失の患者がどんどん記憶がよみがえってきたときの感覚のような、そんなざわざわした気分が襲われてきたのだ。

と、とにかく、この駅から再び電車に乗って、次のトンネルを越えてみるしかない。

おれはそう思って、再び電車に乗った。硬貨はこの時代から変わっていないので使えて助かった。というよりも三十年間も同じデザインなのかとため息が出た。今度過去に戻ったら大蔵省の大臣を目指そうかな、と思った。おれはちっとも懲りていないようだ。

おれはやってきた電車に乗った。二つ目のトンネルに入った。

突然、轟音とともに電車が緊急停止した。トンネル内で事故が発生したのだろうか？

気がつくとおれは車内を数十メートルも転がって大勢の乗客と一緒に共倒れ状態になっていた

。レスキュー隊員であるおれはすかさず乗客を落ち着かせた。そう、おれは消防隊員であった頃もあるので乗客の救助活動を開始した。そしてけが人を見つけては適切な応急手当をし、必要とあれば応急手当用のAEDを使って治療を施した。おれはどうやら外科医もしていたらしい。ろくな医療キットもないので、痛み止めに東洋医学のツボを突いては人々を落ち着かせた。おれは鍼灸師もしていたらしい。小学生の乗客のランドセルに笛を見つけたおれは見事なまでの笛を吹いて演奏した。赤い非常灯だけの薄暗い中、おれの笛の音色は人々を落ち着かせた。おれは音楽家でもあったのだろうか？

おれは何度も三十年間の人生を生きた男だったのだ。その経験をこのトンネル事故ですべて生かすことができた。しかし、おれって一体何者なのだろうか？ 乗客も落ち着いてきた。そろそろおれは一体誰なのかを知りたくなってきたところだ。すると一人の乗客の男性がおれを指差して叫んだ。

「どこかで見た顔だと思ったが、思い出したぞ、こいつ！」

他の乗客も一斉におれに注目をした。その男性は大声でおれに叫んだ。

「こいつ、この鉄道会社の社長だぞ」

乗客全員がざわめきはじめた。

おれはやっとこの時代での身分を確認できた。そうか、ちょうどおれが最後に過ごした人生、自由はないけど鉄道王と言われた社長の人生だったのか。まあ、これでいいか。と、おれが一安心したのもつかの間だった。男性はさらに大声でおれに話しかけた。

「だから言わんこっちゃないだろう」

どうやらおれに文句を言っているらしい。

「このトンネル事故、三ヶ月前に大事故を起こして、すぐに復旧させたばかりじゃないか。やっぱり手抜き工事で利益優先の商売したな！ 前方の車輛なんて完全につぶれているぞ、あんた、また何十人もの乗客を死なせたな、今度こそ自分が乗っているんだから言い逃れはできないぞ！」

それに応じるかのようにそこに居合わせた乗客全員が、おれを人殺しと言ってなじった。

どうやら同じ鉄道会社の社長でもおれの知っている社長人生とは少しちがうようだ。

しかしなぜだろう。こんな大勢の大衆を前にしてもおれの心は平然と、しかも図太く余裕を見せている。

そう、おれは政治家でもあったし、ましてや日本一の弁護士もやったことがあるのを思い出した。そういえば日本を震撼させた悪徳宗教団体の教祖もしたことがあったな。こんな連中、手なずけるなんてわけないな。

そんな中、一人の女性がおれを見て怪訝な顔でつぶやいた。

「ねえ、あの人の顔、なんだかおかしくない？ さっきよりなんか老けてない？」

「あ、そういえば髪の毛がずいぶん白いな」

そんな周囲の小声が聞こえると同時に、おれは体がだるくなり、急に立っているのがつらくなってきた。口の中になにか硬い物がいくつかあることに気がついた。どうやら自分の歯が抜けていたらしい。暗くてよくわからないが、なんだか体中が乾燥してかゆい。

そう言えば、おれって、いったい何回三十年間の人生を過ごしたのだろうか……。

一つ目のトンネルを抜けた『かめじょう』駅であこがれの彼女に何度も告白したなあ。あのかわいい彼女とは何回も幸せな思い出を作ったよなあ……。

たまのて線のトンネル事故は、迅速な救助活動によりトンネルから大破しかけた列車を引き出すことに成功した。列車はトンネルのすぐ先の『たまのて』という駅まで牽引された。その駅でドアをこじ開けて乗客らが救助された。ドアをこじあけると中から水蒸気のような白い霧が勢いよく出たという…。